

パーキンソン病の話

：ウエアリングオフ現象 2

ドパを数年飲んでいると効き目の時間が短くなったと感じる人が出てきます。特に40〜60歳代の患者さんに生じます。このような状態をウエアリングオフ現象と呼び、効果がある（動きに不自由がない）時間をオン時（スイッチが入っている状態）、薬の効き目が少し悪い時間をオフ時（スイッチが切れた状態）と呼びます。長期的には半分くらいの患者さんがこのような状態になり、こうした状態の出る時期を「進行期」と呼びます。

若年発病で起こる 激しいジスキネジア

オン時に見られる症状として

は、▽体が自然と動く▽揺れることがあります。これを「ジスキネジア」と呼びます。軽いと自分では分からないことが多いので気にしないことです。

若くして発病した患者さんでは、薬の効き始めと切れかかりでしばしばジスキネジア（2相性ジスキネジア）が出る 경우가多くなり（下図）、生活に支障が出るほど激しくなることがあります。ジスキネジアは薬がよく効きすぎても起こり、増加する途中と減少する途中で起きます。そしてドパの効果がなくなればジスキネジアは消失して体の動きは悪くなります。激しいジスキネジアの薬物治療は現段階では困難な場合があります。

ますが、脳外科的手術がうまくいけばジスキネジアは消失し、ドパは減量できます。

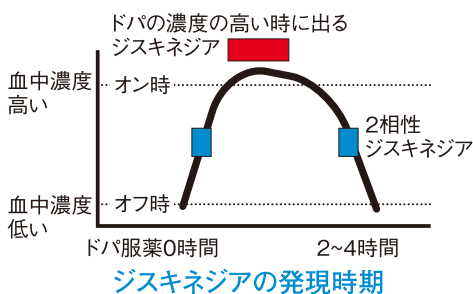
オン・オフ現象

ウエアリングオフ現象はオン・オフ現象とは異なったものです。

オン・オフ現象は、急にスイッチが切れて動けなくなる状態と、突然スイッチが入って動けるようになる状態をいい、ドパの投与量が多い患者さんで生じる可能性があります。現在は、ドパミンアゴニスト併用する患者さんが多く、ドパ服薬量が以前より少なくなっているため、オン・オフ現象が出ることは通常ありません。70歳以下でドパだけで治療していて、その量

が900ミ以上になっている場合には、オン・オフ現象が出ることもありませんが、高齢者ではまず心配ありません。対策としては、▽ドパミンアゴニスト併用を行う▽ドパの量を減らすという両方を行うとよいでしょう。

【図】レボドパ関連ジスキネジアの発現時期とドパの血液内濃度



(2015.7)